

- 1 派遣期日 平成28年8月9日(火)
- 2 研修先 学校名 筑波大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp>
- 3 研修内容

第1回 夢の国語授業研究会 夢の国語授業をつくるために

『夢の国語授業』子どもが夢中になって活動し、授業をしている教師も楽しいと実感できて、しかも子ども達に確かな言葉の力がついていく。

(夢の国語授業研究会 資料抜粋)

(1) 公開授業①

- 研究主題 フレームリーディングとアクティブ・ラーニング
単元名 筆者の意図を読もう
学習材 『すがたをかえる大豆』(光村図書3年下)

○フレームリーディングが子どもの力を伸ばす

文章を丸ごと読む手法がフレームリーディングである。説明的文章におけるフレームリーディングの授業化には、次の3つのステップが必要である。

- | | |
|---------------------------------------|---|
| I 第一段階のフレームリーディング・・・文章の大枠をとらえる段階 | |
| ・具体的事例の数を数える。 | |
| ・頭括型・尾括型・双括型のいずれの型で述べられているか考える。 | 等 |
| II 第二段階のフレームリーディング・・・必要に応じて詳細に読む段階 | |
| ・なぜここに問いがあるのか。 | |
| ・一番○○なものはどれか。 | 等 |
| III 第三段階のフレームリーディング・・・あらためてフレームを見直す段階 | |
| ・問いと答えは整合しているか。 | |
| ・筆者が本当に伝えたかったことは何か。 | 等 |

○アクティブ・ラーニングを成立させる学びの姿

「アクティブ・ラーニング」には、①主体的な学び②対話的な学び③深い学びの3つの視点がある。

アクティブ・ラーニングというと、行動的、活動的な学びの姿を連想し、小グループ学習などの学習形態に目が行きがちだが、問題は、「学び手である子どもが本気になっているかどうか」である。にぎやかな話し合い活動もアクティブ・ラーニングの一面かもしれないが、子どもが課題に対して本気になって対峙している「沈黙の時間」もまた、アクティブ・ラーニングの一面である。授業における教師の役割は、子どもを本気にさせることである。

○協議会

- ・子どもの中の問いの意識
一人一人が、話を読み進める中で、問いを抱き、その問いが動いていくことはよいことである。しかし、問いが拡散することは避けたい。子どもたちの中に生まれた問いが、本時のねらいと合っていることが重要。
- ・情報を多角的に整理
多角的に整理していくと、子ども一人一人にそれぞれの読みの解釈がでてくる。「なんでもあり」の状況になりがちだが、こだわる言葉を選定したり、筆者が伝えたいこと

に迫ったりすることで、「なんでもあり」でなくすることが重要。

(2) 公開授業②

研究主題 「夢の授業をつくるために」

夢の国語授業とは、一人一人が自分の考えを伝え合うことによって、学びの素晴らしさを味わい、確かな言葉の力を付けていく授業である。そこには、子どもたちの主体的に読む姿がある。それらをどう文学的文章の授業で行っていくのか。

学習材 『ゆうすげ村の小さな旅館』から「ウサギのダイコン」「花の添乗員」

○シリーズ化されたものを読むこと

シリーズ化されたものを読むことのよさは、様々考えられる。

- ・その作品世界にどっぷり浸り、読書の面白さを味わうこと。
- ・作品同士のつながりからそこに流れるテーマを読み解こうこと。
- ・比較して読むことで、作品を深く味わうこと。 等

○「自ら思考したくなる場面」の設定

物語をあえて不完全な形で提示する。不完全であるから、完全な形はどのようになるのか子どもたちは考える。場面のつながりや、言葉のつながりなど主体的に読もうとする姿が見られるようになる。それが、「自分の考えを周りに説明したい」「他の人の考えを聞いてみたい」という姿にもつながる。

○協議会

・物語の魅力

伏線（しかけ）があることや主人公の人柄や温かさ等は物語の魅力である。それが作品の面白さにつながる。

・授業の進め方

初めのうちは教師が引っ張ってもよい。途中から子どもがのめり込むようになっていくことが理想。

(3) ワークショップ

【アクティブな子どもを育てる授業づくり】大阪府池田市立池田小学校 大槻先生

★ふきだし法・・・子どもの思いを全て文字にしてノートに書き足していく。

「ここが意味分らない」「おなかすいた」などでもよい。とにかく頭の中に浮かんだことを書いていく。その効果として、子どもの思考が目に見えることや、子どもが主体的に「問い」をもつことができるようになることが期待できる。

★発問づくり・・・子どもが考えるときに、「でも、もし、けど、ということは、だって、やっぱり、だったら、もしかしたら、たとえば」という接続詞を付けることで、考えやすくなる。中でも、「だって」を増やせるような発問を考えていく。

4 感想

今回の研修では、子どもが主体的に作品に入り込む様子を見ることができた。説明的文章の授業では、次々に問いが生まれて、その問いの訳を一生懸命伝える子どもたちを見て、「子どもが主体的に…」という姿を目の当たりにすることができ、自分自身の授業の目標となった。文学的文章の授業では、作品の面白さに子どもたちが自ら気づき、言葉のつながりや場面のつながり等、主体的に読み深めることができていた。教師が先導する読みの学習ではなく、子どもたちの思考をもとに、ねらいにせまっていく授業を目ざしたいと思った。また、子どもの思考を引き出すための手立ても多く学ぶことができてよかった。